

松江城の屋根瓦

―山陰で活躍した瓦工人と城郭整備―

乗岡 実

はじめに

織豊期以降の近世城郭を発掘すると決まって大量の瓦が出土する。これを考古資料と位置付けて歴史の舞台で発言させていく必要がある。編年の問題は、築城や城郭整備また各建造物の新築・修理の時期と密接に関わるし、瓦のありかたは、その城郭の性格とも深い関係をもつ。製作技法の検討は瓦工人の生産技術の究明に繋がるし、さらに他の城郭や寺社の瓦との比較・検討を行っていけば、居城移転や支城整備といった当時の城郭政策、また瓦工人の存在形態、商工体制や物流体制にもアプローチができる。

松江城の瓦の研究は、60年近くも昔の天守解体修理時を嚆矢とする。瓦当文様や刻印の採拓・資料化という基本作業が行われているし、工務から学芸にわたる担当者であった須田主殿氏は建築木部や石垣といった他の項目と同様に、相当な目的意識をもって瓦を調査し分析を行っている。同氏は、他城では意外と少ない鬼面の鬼瓦について、表情豊かな独自の作風であることにも着目したが、堀尾氏の家紋である分銅文の刻印をもつ瓦や五七桐文鳥衾を築城期のものと判断したり、大坂瓦屋の刻印瓦を確認し、さらに松江近隣の瓦生産地についての史料調査までも行った⁽¹⁾。

その後は松江城の瓦はあまり注目された形跡がないが、城郭部の発掘調査で出土品が蓄積され、2001年には出土瓦の分類が初めて行われた。また城郭出土瓦の集成⁽²⁾や山崎信二氏による全国視野での近世瓦の体系的研究⁽³⁾でも松江城の瓦が取り上げられた。さらに近年では城下の武家屋敷地跡に当たる松江歴史館用地で発掘調査が行われ⁽⁴⁾、出土層位に基づいて瓦の年代を考える途が開けてきた。いっぽう堀尾氏の松江城前段の居城である富田城を始めとする出雲・伯耆の他の城郭や遺跡から出土した瓦も蓄積と報告・分析が行われ、比較検討を共同研究として進める環境も整いつつある。

市史松江城編の刊行に向け、松江城の歴史究明を広域的視点で多面的に進める機運が高まる中で、瓦について現状での課題の整理と展望を行い、次の研究の叩き台することが本稿の目的である。

1. 松江城の瓦の分類とおよその年代

(1) 軒丸瓦

図1は瓦当文様に基づく飯塚康行氏による分類⁽⁵⁾で、城郭中枢部で行われた一連の史跡整備に伴って出土した瓦が対象である。三巴文のうち内側の頭部に対して外の尾部が右に巻くものがA類、三巴で左に巻くものがB類、巴文以外の文様＝分銅文をもつものがC類とされた。A類・B類は瓦当面の大きさや、珠文の大きさや数、それに彫りの深さなどによって細分されている。分銅文は寛永10年(1633)を下限とする堀尾家の家紋であることからC類は堀尾期のものと判断され、またA-1～4類は17世紀初頭の遺構とみられる太鼓櫓西方SK01から出土したことから古いタイプとされた。

確かにA類、うちでも細分番号が小さいものは、三巴文軒丸瓦の一般的な編年観に照らしても、頭部が小さく尾部が長い、珠文が小さく数が多いなど古い特徴をもつ。特にA-1類の様な圈線をもつものは古式で保守性が窺えるが、といって16世紀のものではない。図示された個体と範キズが一致する同範品が17世紀前半～中頃の城下(歴史館)北屋敷第3面から出土している(11・12)。またA類と近

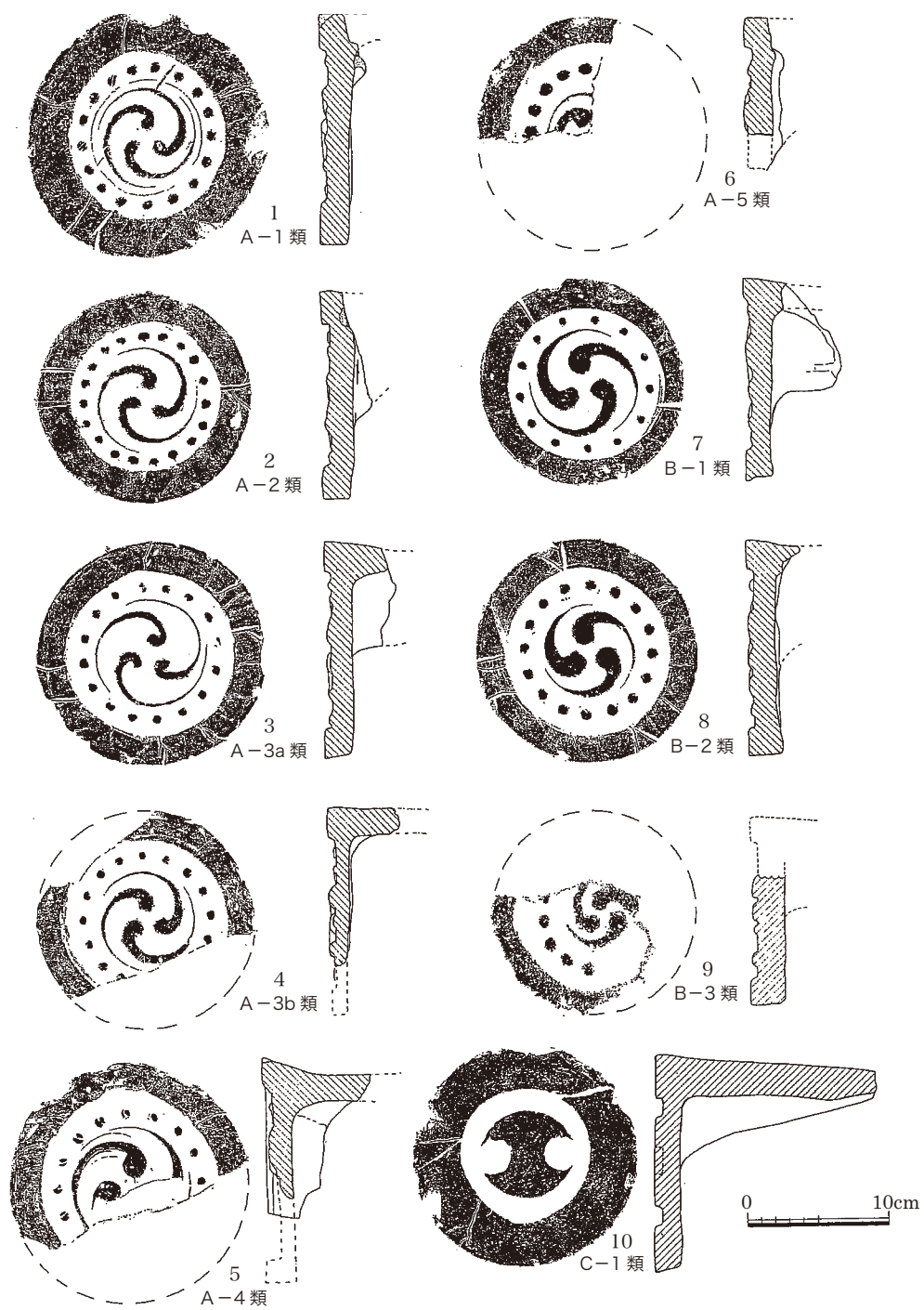


図1 松江城城郭部出土の軒丸瓦の分類（1／5） 飯塚2001による

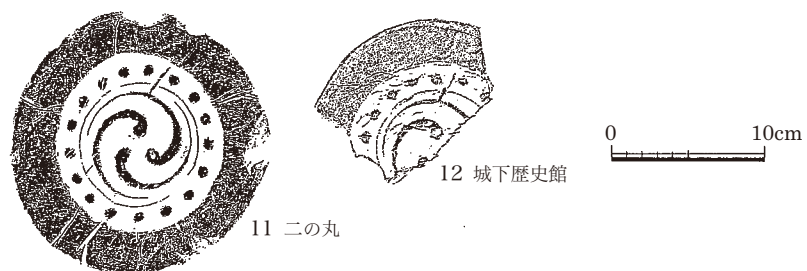


図2 松江城城郭部と城下町出土の同範軒丸瓦（1／5）

似する文様・製作技法・焼成の瓦は、堀尾氏松江移転の慶長 16 年（1611）もしくは元和 1 年（1615）前後を下限とする富田城（安来市）の城郭部、あるいは他地域の併行期の城館や遺跡で確認されていることも、A 類を築城期ないしは堀尾期の製品が中心と考えることを支持する。例えば、A 類の丸瓦内面に残された粘土板切断時に生じるコビキ痕⁽⁶⁾は、横方向に条線が残る B 技法でも目が粗いもので富田城の瓦と共通するし、他地域の城郭に伴う慶長頃（＝斜め方向に粗い条線が残るコビキ A から B への変換直後）の瓦とも共通する。珠文数 16～17 は備前岡山城の編年⁽⁷⁾に照らすと岡山城 4 式、正に慶長中葉から後半の特徴で、珠文の大きさや巴の形態などについても同様である。

逆に B 類は、およそ 18 世紀以降の特徴をもつものを中心とする。瓦範の剥離剤としてキラコ（雲母粉）を用いるもの、外器面や文様面が極めて平滑なもの、焼成が極めて良好なもの、炭素分の吸着を極めて良く器面が銀化したものを含み、文様自体も巴の頭部が大きく尾部が短い、文様区全体の中で巴部が狭いものも、一般論として新しい様相である。

確かに松江城では 18・19 世紀に左巻きが多いという特徴は指摘できるが、他地域の城郭では 16 世紀末から 17 世紀でも左巻きはあるし、18・19 世紀でも右巻きがあり、松江城の軒丸瓦全体として、右巻きは必ず 17 世紀の製品で、左巻きなら 18・19 世紀と言い切れるかどうかはまだ分からない。また、例えば岡山城では 18 世紀に入ると珠文は 12 個で定式化し、18 世紀後半には粗大化するのに対し、松江城では遅くまで珠文数が多いものや珠文が小さいもの、したがって珠文帯の余白が広いものがあるのも特徴である。

文様分類は最終的には個々の瓦範を念頭におく必要がある。後述の軒平瓦で想定される瓦範数は現状でも 40 近いから、軒丸瓦も相当数の種類＝瓦範数があったはずで、まずは集成・分類作業が必要である。さらに、文様だけでなく、製作技法や調整技法、胎土・焼成、刻印などの属性を含めて、松江城の瓦全体として型式・様式認識を行い、編年を進めていくことが今後の課題である。

(2) 軒平瓦

軒平瓦は、松江城全体に関わる瓦を現状で可能な限り見渡し、瓦範レベルを念頭に文様種の暫定的な集成を行い、図 3・4 として 39 種を掲げた。21・23 は同範で 1 種と数える。先ず中心飾りから、下向三葉、五葉、橘、宝珠に大別する。

下向三葉は、葉が丸みを持った幅広で葉脈表現を伴う。これは、花をもたないか省略した桐を表現した可能性があり、同様の文様を桐葉・蔦葉と記述する研究者もある。左右の唐草は全て二転である。A 類は中心飾の葉脈表現が支脈まであり唐草が中心飾りから派生するように蔓状に展開し、内が下、外が上に巻くものである。A 1 類（飯塚 a-1 a・a-1 b）に対して、葉が大きく中心飾の脇で蔓が下に窪まないものを A 2 類とする。B 類は唐草の内が上、外が下に巻くもので、29 を除けば各々が独立して蔓状にならない。中心飾りの葉脈表現が主脈のみで、三葉全体としては彫りが深く立体的で、左右の葉が外開き、文様区高が高いものを B 1 類（飯塚 a-2）、やはり中心飾りの葉脈表現が主脈のみであるが、三葉全体として彫りが浅く、左右の葉が横に開き、文様区高が低いものを B 2 類（飯塚 a-3）、中心飾りの葉脈表現が支脈まであるものを B 3 類とする。B 3 類も、中心飾りの彫りが深く左右の葉が斜め下に開く 32（飯塚 a-4）などと、彫りが浅くて横に開くもの（飯塚 a-5）に細分できる。

中心飾り五葉は下向三葉の上に眉毛状の二葉が付加された形で、葉脈表現がなく、全体がベタで盛り上がる。やはり桐葉を表現した可能性があるが、五葉蔦葉、割蔦と呼ぶむきもある。同じ文様を左右二重に配して特異な 40 を除いて唐草は三転で、内側から順に上・下・上と巻く。中心飾りの下の三葉に幅があり、上の二葉が横に伸びて流れが唐草に続き、唐草が個々に分離するものを A 類（飯塚 b-1 a・

下向三葉A1類

下向三葉A2類

下向三葉B1類

下向三葉B2類

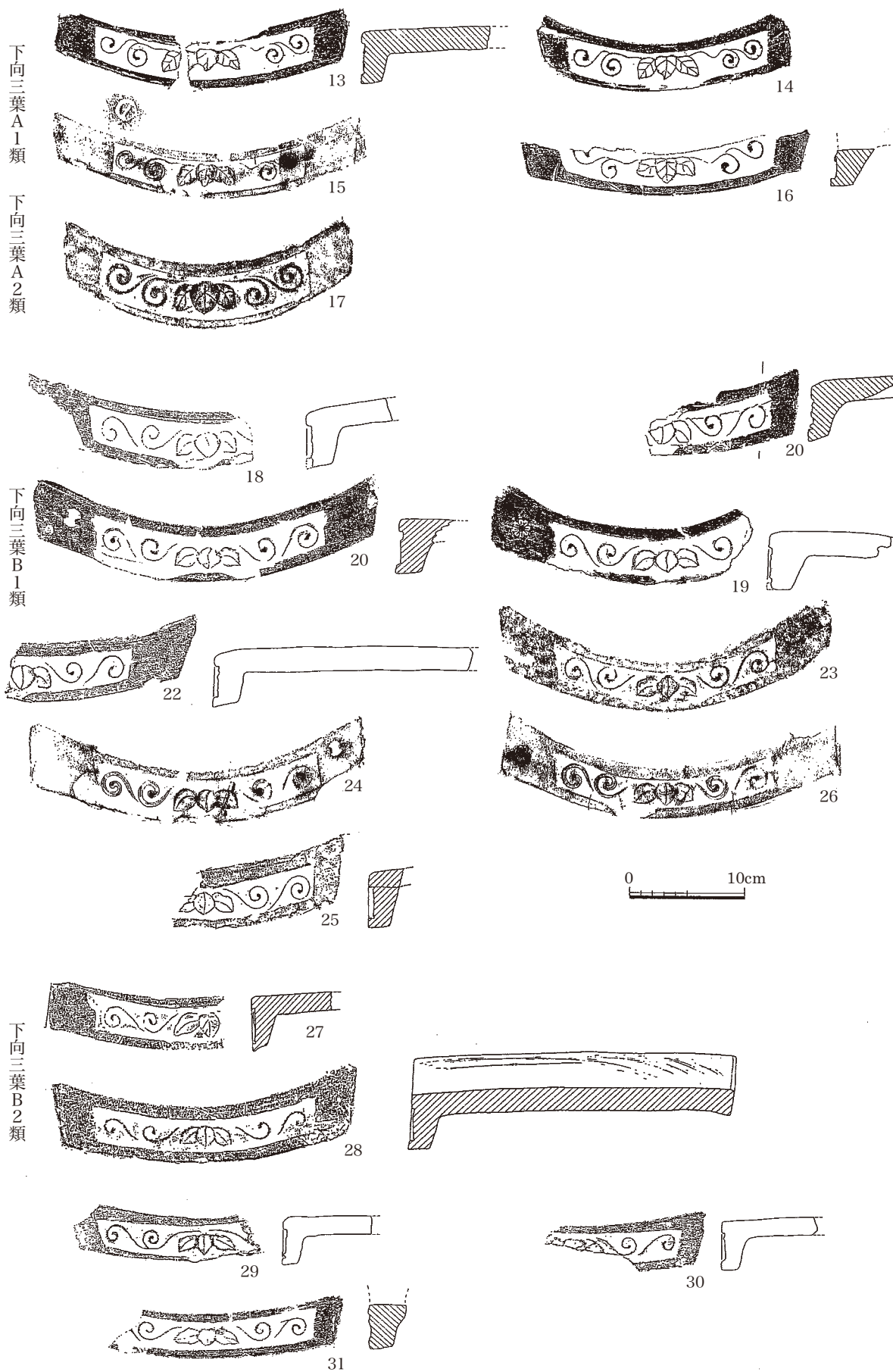
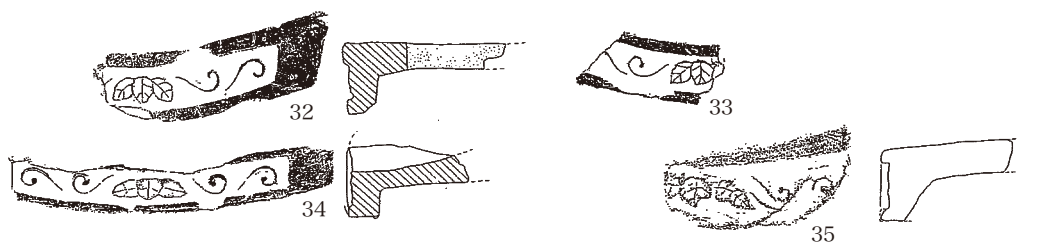
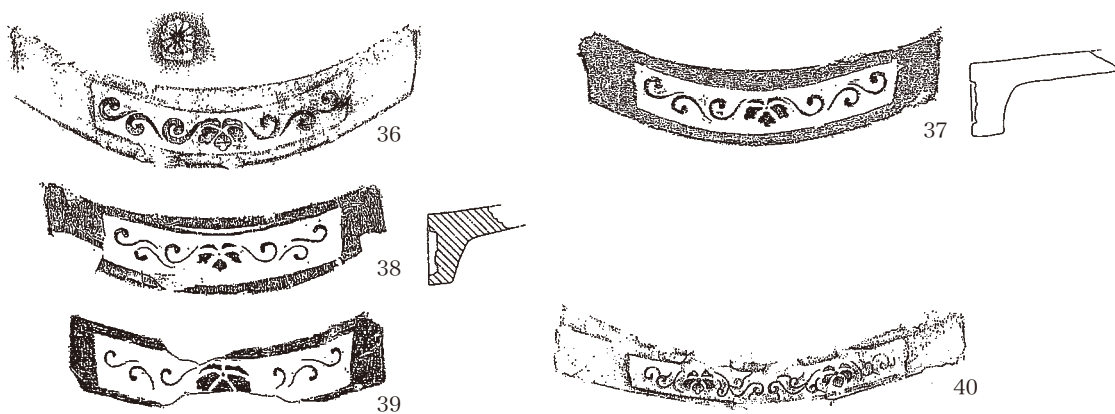


図3 松江城の軒平瓦Ⅰ（1／5）

下向三葉B3類



五葉A類

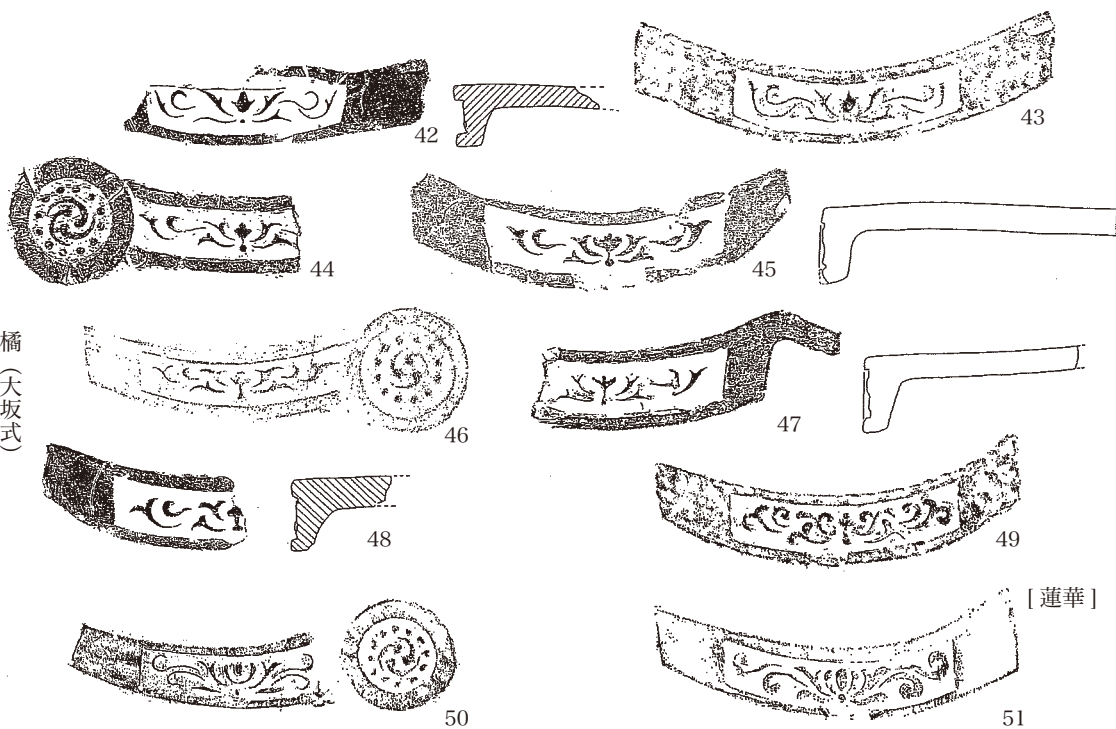


五葉B類



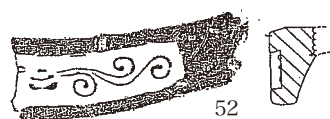
0 10cm

橘（大坂式）



[蓮華]

宝珠A類



宝珠B類



図4 松江城の軒平瓦Ⅱ（1／5）

b-1b)、中心飾りの下の三葉が狭くて先端が割れ、上の二葉が線状で斜め上に伸び、唐草が連結するものをB類とする。

中心飾り橘は、橘ないしは柿実形～宝珠形を真ん中に据え、左右で斜め上に伸びる鰐の先端や下から横に伸びるガクの先端が二股に分かれるという特徴をもち、大坂式⁽⁸⁾と呼ばれるものである。定型的な大坂式とみられる42～48（飯塚b-2・3を含む）とその亜流とみられる残りに細分できる。50・51、特に51は、全体の文様構成としては鰐の割れなどを含めて同類であるが、中心飾りだけを取り出せば蓮華文と呼ぶべきものである。橘文類は将来もっと明確な基準で細分を行っていく必要がある。

中心飾り宝珠は、宝珠が立体感のある三段表現で、唐草が内から下・上・下に連結して長く伸びるのが特徴的なA類と、宝珠が平板で先の大坂式と近似する二股に割れたガクを配するB類がある。

松江城全体として、最も量が多いのは下向三葉B類である。次に五葉A類、橘と続き、この三種は城郭部各地点から城下（歴史館）まで普遍性をもって及んでいる。下向三葉A類は城郭部で一定量が確認できる。五葉B類は城下（歴史館）で数個体が出土したが、他地点にまで普遍性を持つかどうかは判らない。宝珠A類は本丸で、宝珠B類は城下（歴史館）で各1点が確認されているのみである。

下向三葉の中心飾りを持つものは、17世紀前葉の築城時を中心とし、全体としても17世紀の製品と判断できる。他種に比べて製作技法や文様構成が古相で、大量に存在することも築城期のものを含むと考えるに相応しい。他地域の瓦と対比して、全般的な製作技法、側区の短いものを含む点や焼成の特徴なども同時期の特徴をもつ。また松江城では五葉・橘の中心飾りをもつものがそうであるように、江戸後半期に流行る棧瓦やキラコ使用のものも含まない。B1類には堀尾家家紋の分銅文の刻印をもつものを含むし、城下の松江歴史館出土の瓦の内、堀尾期であることが確実な第4面を含めて、17世紀代の層位に伴うものは悉く下向三葉のB類各種から構成されることは決定的である。後述するようにA、B1類は同文で同じ製作技法上の特徴を持つものが富田城で重きをなすということも大きな根拠となる。逆に五葉・橘の中心飾りをもつものは18・19世紀の製品と判断できる。宝珠A類は製作技法、富田城や江美城（鳥取県江府町）に同範とみられる瓦があることなどから16世紀後葉～17世紀前葉の製品、宝珠B類は文様構成図が中心飾り橘＝大坂式との類似や出土層位から18世紀後半以降の製品と判断できる。

2. 16世紀末～17世紀前葉の瓦の検討

(1) 軒丸瓦

丸瓦部内面を中心に観察できるコビキ痕は16世紀後葉から17世紀前葉の瓦の製作年代を考える上で重要な視点であるが、その変換年代は地域ないしは瓦工人によって若干の時期差がある⁽⁹⁾。早い地域では天正10年代後半にコビキBが出現するが、備前岡山城の瓦では、宇喜多期ほぼいっぱいコビキAに終始し、慶長2年（1597）以後、慶長5年（1600）前後に変換する⁽¹⁰⁾。また、山陰では、伊藤創氏が伯耆の城郭瓦について、B技法は文禄から慶長のごく初め（1595～1600）に出現し、1600～1602年にAからの転換をほぼ終えたと考える⁽¹¹⁾。慶長12年（1607）に築城が始まる松江城で実際に確認される瓦は圧倒的多数がコビキBである。古相の瓦でも瓦当が残るもの、堀尾氏の分銅文の刻印を伴う瓦も総てがBで、松江城築城時の膨大量あったとみられる新調瓦はコビキB主体で、圧倒的多数の全国他地域、また隣接する伯耆の状況と整合する。しかし、松江城ではごく少量ながらもコビキAの瓦がある。古瓦流用の結果であるのか、少数派ながらも慶長後半までA技法を温存する瓦工人も参画したのかは今後の検討課題である。前者の可能性では、堀尾氏の前段の居城で、コビキAの瓦も確認できる富田城からの搬入品の可能性も視野におくべきで、胎土分析も有効な手段になるだろう。同じ視点は当然に軒平瓦やその他の種類の瓦にも求められる。

天守所用の鳥衾瓦には、須田氏が堀尾期と考えた五七桐文や、松平期と考えられる葵文を瓦当にもつものがある。そのほか家紋類を瓦当文とする瓦として、城郭中枢部で散見できる分銅文のもの、城下の歴史館用地で数個体が出土した桔梗文のものがある。前者は城主の堀尾家、後者は重臣の堀尾采女家・右近家〔＝揖斐氏〕の家紋瓦と考えて良い⁽¹²⁾。いずれも瓦当が軒丸瓦と同大であるが全て棟込瓦である。家紋瓦は慶長という早い時期から家臣屋敷にまで及ぶこと、軒丸瓦ではなく棟瓦で家紋を主張している点が、同時期の他地域の城郭瓦に対する特徴である。天守の鬼瓦は鬼面としても、その他の建物の鬼瓦はどんなデザインで、家紋が含まれないのかが気になるところである。

図2に示した堀尾期とみられる二の丸と城下歴史館用地に跨がる事例のような、城内の異なる地点間、あるいは松江城以外の瓦との同範関係の抽出作業も今後の課題である。

(2) 中心飾り幅広下向三葉の軒平瓦

a) 文様系譜

松江城で堀尾期の軒平瓦にメインで採用された文様は、全国的な視野でどのような位置づけのものであろうか。図5は各地で確認されている16世紀後葉から17世紀前半の軒平瓦で類似文様をもつものを集めた。その大半は松江城築城に先行、遅くとも同時期のものである。後述の富田城、米子城を除けば、下向三葉A類・B類とも同範あるいは同範的同文のものは確認されておらず、細かくみると富田城・松江城を中心とするこの文様の瓦は個別性が強いといえる。

しかし、大局とすれば類似文様は、東北から九州にわたる全国各地に分布する。出土地の多くは秀吉の居城であった大坂城、聚楽第を含めて、織豊系城郭とされるものである。唐草の巻きは内が上、外が下でB類と同じものが多く、また葉は支脈まで表現したものが圧倒し、その意味ではB3類に近いものが多い。B1・B2類の大きな特徴として葉脈表現が主脈だけという点があるが、類例は全くの少数派で、58 摂津大坂城例、68 安芸不動院例がある。蔓状の唐草が特徴的なA類も唐草に着目すれば少数派であるが、天正一桁代に播磨英賀の瓦工人が作った瓦90から松江城の94といった系譜（単一の瓦工人の系列としてこの順に変化したという意味ではない）も想定できなくはない。その際、90と同範の瓦は備前・美作の城郭や寺院でも数多く知られ、播磨から出雲への接近という点でも興味深い。いっぽうで先の58大坂城城例や93筑前観世音寺例と94松江城例の類似性は注目される。

次の視点として、各城郭で幅広で下向三葉、あるいは桐を含めて中心飾りとするものが、松江城のように主体を占めてそれへの斉一性が強いのか、多種の中の一部に過ぎないのかということがある。その点では、大坂城、聚楽第、岡山城、広島城、肥前名護屋城などでは多種の中の一部、またはごく少数派でしかない。17世紀前葉で、こうした文様が主体を占める、あるいは目立った存在をなす城郭が集中するのが山陰である。具体的には、鳥取城、米子城、津和野城、隣接する美作津山城を含めて幅広下向き三葉の中心飾りが優位な圏域があり、富田城・松江城はその中核をなす。いっぽう東北の会津若松城でも松江城のB3類にかなり近似した瓦が量の重きをなし、この城の築城時の瓦は文禄2年（1593）に播磨から工人を呼び寄せて焼いたと伝わること⁽¹³⁾と合わせて注目される。

富田城・松江城にこの文様の瓦を供給した工人の出自は直ちには特定できない。しかし、この文様を生み出す土壌は、畿内から山陽、あるいは北部九州にあったといえよう。織豊期の瓦工人は頻繁な移動や系統の分岐、地域内での二次変容もありえて複雑である。ちなみに、堀尾氏が前任地である浜松城やその支城の二股城で用いた瓦は、中心飾り三葉も含むが葉は上向きで幅が狭いもので唐草も異なり、遠江で活躍した瓦工人が堀尾氏とともに出雲に来て富田城・松江城の瓦を焼いたという可能性は薄い。



図5 各地の中心飾り下向三葉・桐・蔦葉の16世紀後葉から17世紀前半の軒平瓦（1／6）



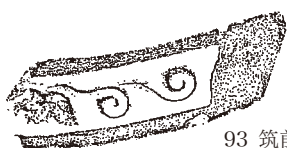
90 淡路妙京寺



91 播磨門教寺



92 肥前名護屋城



93 筑前観世音寺



94 松江城

下向三葉A 1 類関連



95 富田川河床



96 松江城

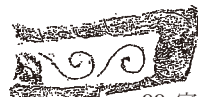
下向三葉A 1 類関連



97 富田城



98 富田城



99 富田城



100 松江城



101 松江城下



102 米子城



103 松江城下

下向三葉B 1 類関連



104 富田城



105 江美城



106 米子城



107 米子城



108 米子城



109 米子城



110 松江城



111 松江城



112 米子城



113 米子城

下向三葉B 3 類関連

図6 山陰諸城を廻る 16世紀葉～17世紀前葉の中心飾り下向三葉の軒平瓦 (1 / 5)

b) 出雲・伯耆諸城の松江城下向三葉A類・B類の同文瓦

松江城B1類と同文の瓦は富田城で大量に確認でき、米子城でも一定量が確認できる。

富田城の同文瓦(A-1類)⁽¹⁴⁾は軒平瓦の量の主体を占め、月山山上の本丸・二の丸・三の丸をはじめ、山中御殿や千畳平、それに城下の富田川河床遺跡などでも出土し、その分布状況や想定されるコビキBの丸瓦との共存関係などから、慶長年間、すなわち堀尾期の製品と判断できる⁽¹⁵⁾。今のところ松江城B1類と同範関係が確認されたものはない。細かな検討を行えば同範品が確認される可能性が多分にあるように思えるが、中心飾りの中心葉の主脈の微妙なカーブが左右逆になっている場合が多い。大枠として比較すると、中心飾りは、富田城の方(97～99)が肉厚で、葉の外形の微妙なカーブが変化に富んでリアルであるのに、松江城の方(100・101・103)は単調、つまり様式化が進行しているし、富田城は側区が狭いのに対して松江城では広がっている。これらのことは、松江城築城期の瓦が富田城で主体となる瓦よりも新しい事を示し、堀尾氏は先ず富田城に入って瓦葺建物の建造を伴う城郭整備を行い、その後に松江城を築城したという歴史的事実に対応する。松江城にはB1類に対して中心飾りがさらに単調化したり、唐草の巻きが小さくなった同文新相のB2類がある。大筋では富田城(A-1類)→松江城・下向三葉B1類→松江城・下向三葉B2類と変遷したものと考えられる。つまり、富田城、恐らくその最終段階の瓦製作で中心的な役割を果たした工人集団が、松江城築城時にも中心的な役割を果たし、その後も一定期間は松江城に瓦を供給したという図式が読み取れる。彼らは先ず富田で編成され、堀尾氏に伴って松江に移動し、松江に定着した。

同文の米子城の軒平瓦(A群1類の一部)⁽¹⁶⁾は17世紀前葉の軒平瓦の主力を占めるわけではないが、図示した102のほかにも山陰歴史館展示品などを含めて複数の同文品を含んでおり、富田城や松江城との同範品が将来確認される可能性がある。先述の変遷観に照らせば、松江城より富田城に近いものが目に付く。いずれにせよ同文品の分布の重心は出雲側にあり、出雲に定着しつつあった瓦工人の出張製作もしくは製品搬入があったと見通せる。

松江城のA1類(96)についても、少なくとも同文、あるいは同範の可能性ももつ瓦(95)が富田城下の河床遺跡で出土し、これも両城共通の瓦といえる。

さらに松江城B3類の類似品(104～113)は出雲では富田城、伯耆では米子城・江美城で確認できる。うちでも、104・107・110、109・111はそれぞれ同一の文様系譜と理解されるし、105・108は同範品の可能性を検討すべき組み合わせである。

(3) 出雲・伯耆諸城を廻るその他の種類の軒平瓦の同範・同文関係

○肉彫宝珠唐草三転(116～118)

松江城宝珠A類と同範と判断されるものが、富田城(B-1類)、佐太前遺跡(松江市鹿島町)⁽¹⁷⁾で出土し、その可能性が高いとみられるものが江美城八幡丸でも出土している。富田城では月山山上部を中心に山中御殿でも確認されるが、山上部ではコビキBだけでなくコビキAの丸瓦を伴うことなどから、先述の下向三葉類よりも古い製品の可能性もある。松江城では現状1点だけの確認であるが、平瓦部凹面の二次調整が甘く、コビキB痕とみられる条痕が観察できる。

中心飾りが肉彫りでないが同じ宝珠で、唐草が近似する瓦が姫路城(114)や大坂城(115)で確認されている。姫路城例は慶長6年(1601)の池田輝政による大改修以前のもので、天正8年(1580)の秀吉による織豊系城郭への改造時に伴う可能性があり、大坂城例は天正11年(1583)に秀吉によって築城される大坂城の瓦の内でも比較的早い段階のものともみられ、両者は同範で、播磨の姫路系の瓦工人による製品とみられる⁽¹⁸⁾。この天正半ば頃の播磨姫路の工人による瓦をモデルに松江城宝珠A類が

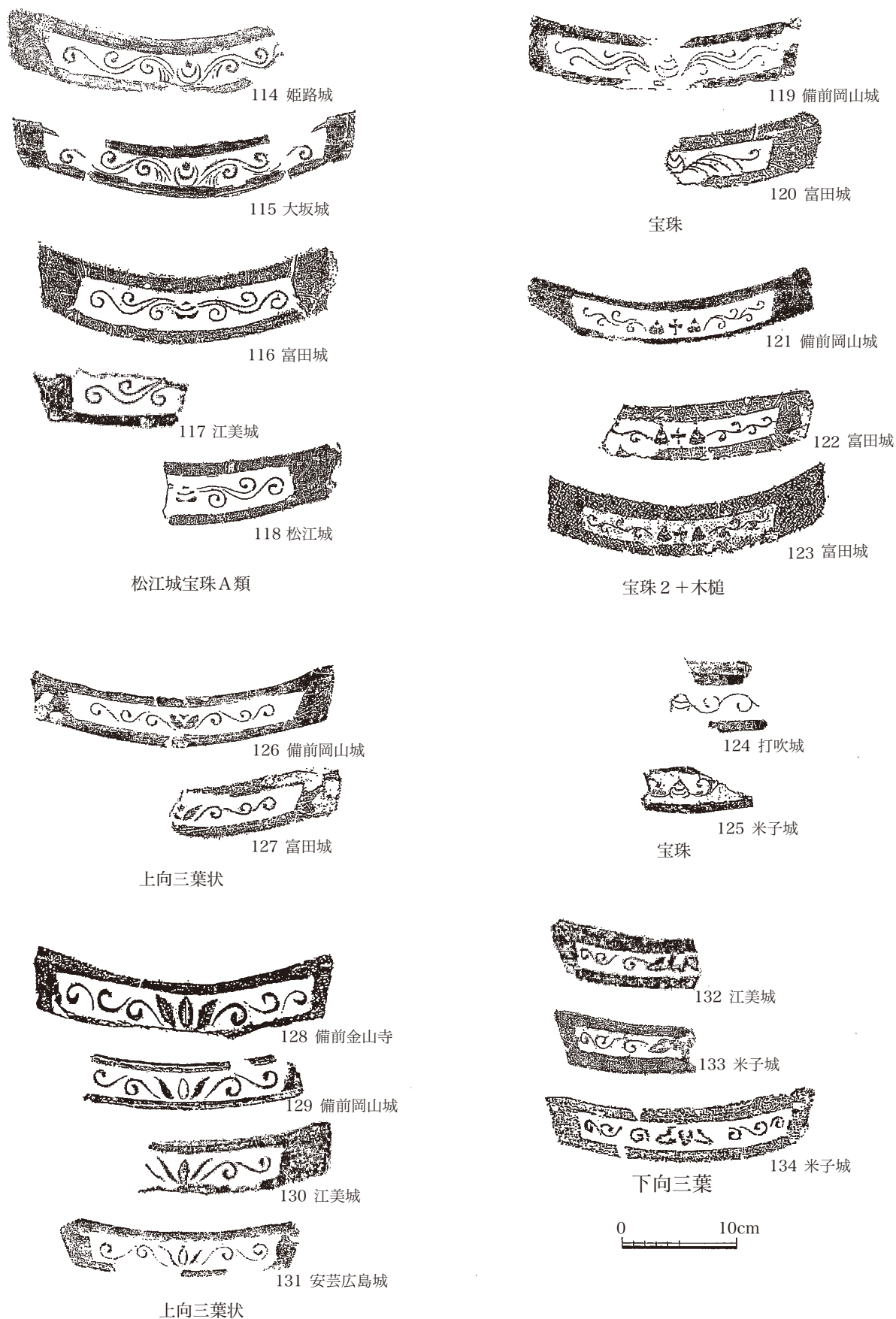


図7 山陰諸城を廻る 16世紀後葉～17世紀前葉の同範・同文の軒平瓦 (1/5)

成立した可能性が考えられるが、製品としての特徴は両者間に断絶があるようにも感じられる。

○凸面宝珠2+木槌（119～121）

富田城山上曲輪（B-3類）と米子城（F群）で同範品が確認されている⁽¹⁹⁾。特に米子城飯山地区では軒平瓦の主体を占め、コビキBの丸瓦と共存している⁽²⁰⁾。これらと同文異範の製品が、備前岡山城で出土している。その121は、平瓦部凹面にコビキA痕を残し、岡山城2式=宇喜多秀家期に属するものである。また唐草に着目すると富田城・米子城のものが、岡山城例より硬直化している。つまり、岡山城→富田城・米子城の時期変遷が読み取れる。

○線形宝珠蔓状平行唐草（122・123）

富田城の山上曲輪（B-2類）と同文系の瓦が備前岡山城で確認されている。岡山城ではこの文様の軒平瓦は、岡山城2式を中心に多種あって大量に出土する。全国的にみても個性的な文様で、分布の中心は明らかに宇喜多秀家期の岡山である。120は側区が狭く、文様区が高く岡山城2式でも古相のものであるが、岡山城→富田城の時間差・系統関係が見通せる。

○線形宝珠連結唐草（124・125）

唐草が宝珠と接して始まり、数珠状に連結するのが特徴的な軒平瓦が打吹城（倉吉市）と米子城（B群の一部）で確認されている。打吹城ではコビキAの丸瓦と共存している。近似した文様は、鰐淵寺（出雲市⁽²¹⁾）にもあり、出雲・伯耆の一定圏域に及んでいるとみられる。

○上向三葉状（二葉+V）唐草三転（126・127）

中心飾りが特徴的である。富田城山上部の127と同範の可能性をもつものが、126 備前岡山城で出土している。岡山城2式のもので、平瓦部凹面にコビキA痕が残る。同範で良ければ、範が潰れているぶん、富田城例は製作が新しい。

○幅狭上向三葉（128～131）

幅狭で上向三葉の中心飾りの軒平瓦は全国各地にあるが、江美城本丸で量の主体を占める130は中央の葉脈が主脈のみで中空に見える特徴をもつ。それぞれ異範であるが、唐草の巻き方を含めて同文とみられるものを図示した。128は備前金山寺の天正3年（1575）の再興時の瓦で、唐草は三転、当然にコビキAの瓦と共存している。この系譜は唐草二転となった岡山城129に引き継がれている。130は江美城本丸でコビキAの丸瓦と共存するが⁽²²⁾、側区の広さや、中心飾り・唐草の矮小化に着目すると、備前の二例よりは新相である。

○下向三葉唐草三転（132～132）

江美城と米子城（A群2類）に跨がる同文の軒平瓦で、米子城湊山地区ではコビキBの丸瓦と共存する⁽²³⁾が、瓦そのものは唐草数が多く、側区も狭いことから一見古く見える。米子城では複数の瓦範があり、そのうち133は132江美城例と同範の可能性を検討すべきである。いずれにせよ、この種の瓦の量の分布の中心は米子城にある。

(4) 瓦をめぐる諸問題

a) 松江城下の瓦工房

松江城の瓦が焼かれた場所を考古学的に特定することは、今のところ困難であるが、堀尾期の城下町絵図には、城郭部から内堀を挟んで北岸の屋敷区画の中に「瓦焼」の記載があり⁽²⁴⁾、築城時にも瓦が焼かれた場所であった可能性が窺える。全国各地の城下町遺跡の最初期の屋敷地のさらに下層では鍛冶炉などがしばしば発見され、築城時には直後に城下町となる区域=城郭中枢部の最寄りに臨時の各種工房が形成されることが一般的であったとみられるから、松江城の場合も同様であり、ことによると複数

地にあった臨時の瓦工房が集約され、築城工事・城下町建設の一定の完成後に引き継がれた姿が絵図に示されているとの見方もできる。築城時に城郭部最寄りで焼かれた瓦は、メインで用いられた瓦、軒平瓦でいえば下向三葉の中心飾りをもつものに違いない。堀尾期に続く京極期（1634～37年）の絵図にも近隣別地点の屋敷区画に「瓦屋 忠左衛門」の記載があり、継続して生産されたことが判る。先述した下向三葉B2類と、B3類でも新相のものは、堀尾期の内でも築城後、あるいは京極期かそれ以降の製品であろう。17世紀前半の松江は市中に自前の瓦生産地を抱える都市であった。

ところで、築城時の松江城にメインで瓦を供給した工人集団は、堀尾氏によって先ず富田城で編成されたとみられるが、両城の製品の違いは刻印の有無にも表れる。松江城では堀尾期とみられる刻印には少なくとも分銅文と菊文があるが、富田城ではそうした図形刻印は確認でされていない。松江城では100・101のように同範品でありながら異なる刻印をもつものがあり、単に瓦工人を示したとは考え難い。いま細かな解釈は難しいが、富田城段階と松江城段階とは生産体制ないしは製品管理体制に何らかの違いがあり、そのことが刻印の有無の差に反映されているのであろう。大坂ブランドの屋号を主張する橘文軒平瓦の一部とセットとみられる瓦の刻印は別としても、菊一などの図形印は18世紀以降の在地系とみられる中心飾り五葉の軒平瓦などにも継続する。松江城の瓦を特徴づける刻印の集成と評価は今後取り組むべき課題である。

b) 16世紀末～17世紀前葉の出雲・伯耆の瓦供給ネットワーク（図8）

松江城の下向三葉B1類と同文の軒平瓦は、富田城・松江城・米子城の3城に及び、3城に共通の瓦工人があったと解釈できる。別の種類の軒平瓦でも、その3城に江美城を加えた4城、また佐太前遺跡に関わって同範・同文の組み合わせが複数確認できた。この時期の出雲東部から伯耆西部には、瓦工人集団の系統が複数あったが、各々の製品が複数の城・遺跡に及んでいて、全体として一つの瓦供給圏を成していたと言えそうである。

c) 諸城の瓦葺建物整備年代と瓦工人（図9）

富田城では堀尾期とみられる下向三葉A類・B類系統以外に、それより古相の5種程度の軒平瓦が山上部を中心に確認されているが、先の検討で3種までが岡山城2式の軒平瓦と深い関係を持つことが判った。これら3種は岡山城出土品より製作が新しいとみられ、宇喜多秀家による岡山城本丸での建物整備よりも遅れて建物整備（ないしは補修）があった可能性が高い。岡山城の瓦の年代観から、それは慶長5年（1600）を下限とする吉川広家期の内としても、天正19年（1591）の入城時ではなく、古くとも文禄年間と見通せる。3種の瓦を製作した工人は、引き続きコビキA技法を行っていても不思議でなく、山上部を中心にあるコビキA痕を残す丸瓦の担い手の少なくとも一部であったと考えうる。

問題は、富田城でそれ以前にも瓦葺建物があったかどうかである。松江城宝珠A類の同範品は、天正前半に遡る可能性も指摘されている⁽²⁵⁾が、松江城の同範品はコビキB痕が残るものであるし、整備年代が新しい山中御殿でも出土する。また、先述の姫路城・大坂城の114・115に比べると、文様が委縮し側区も広めで、質感も新相である。天正後葉から慶長期の可能性が浮かび上がるが、これを播磨系工人の製品とすると、彼らは岡山の工人よりも早くにコビキの転換を終えており、富田城の製品が天正後葉としてもコビキBのものであっても良い。富田城では別に中心飾りがやはり肉厚宝珠で、脇にそれを包み込むガク状に立ち上がりながら下に巻く小唐草を配するのが特徴的な軒平瓦⁽²⁶⁾がある。この文様も播磨系とみられ、姫路の阿賀本徳寺・御着城など播磨を中心に16世紀後半の瓦で散見できる⁽²⁷⁾。岡山城と関連が深い瓦を用いた建物整備に先行して、播磨系のこの2種を用いて最初の建物整備があった可

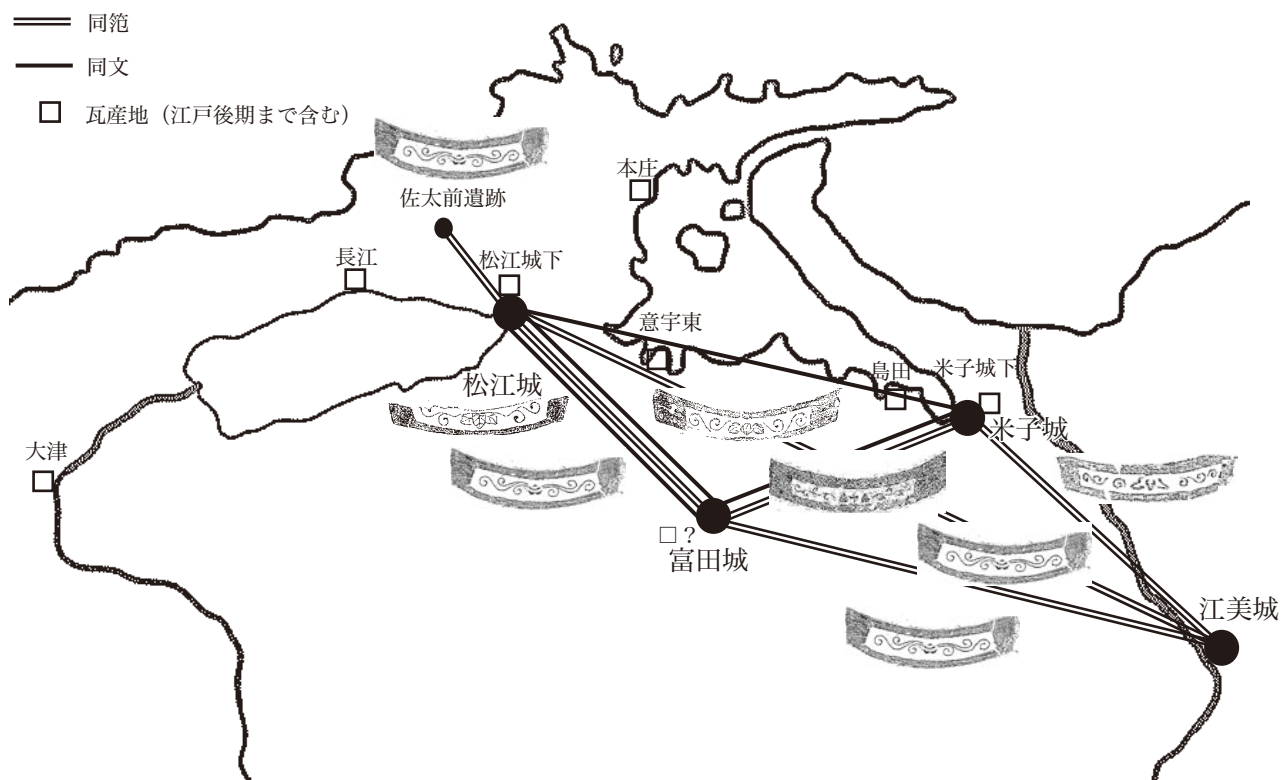


図8 16世紀末～17世紀前葉の同範・同文関係

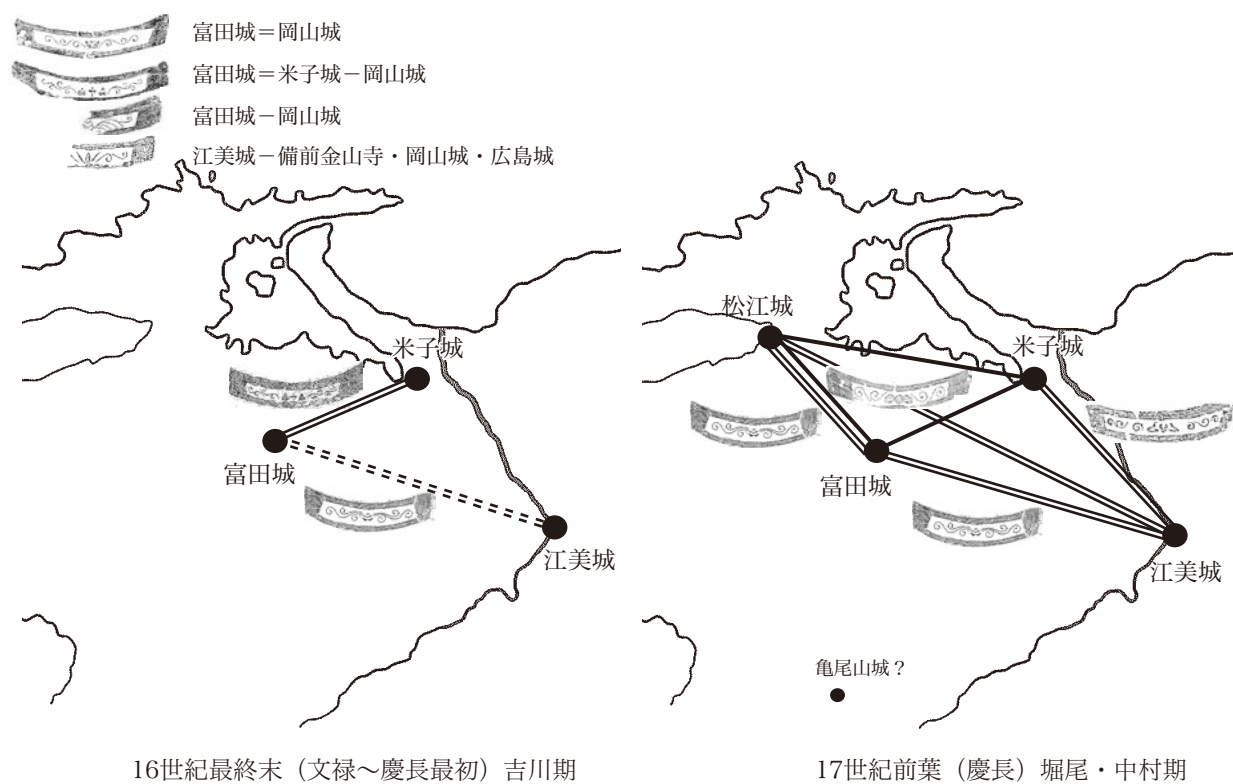


図9 出雲伯耆の諸城を廻る同範・同文関係

＝同範 ー同文

能性も浮かぶ。ただ、松江城宝珠A類同范品は細かな時期特定が現状では難しく、量や出土状況も踏まえつつ、堀尾期となる慶長前半の下向三葉と同時期の製品である可能性までも視野において検討すべき課題と考える。いずれにせよ、富田城山上部で瓦葺建物を伴う城郭整備が行われたのは天正19年(1591)の吉川広家入封以後で、その前の毛利期では瓦葺建物はなかったと判断できる。

米子城の飯山地区で主体を占める凸面宝珠2+木槌の軒平瓦も岡山城の瓦との同様の関係があり、しかもコビキBの丸瓦と共存するから、コビキの変換を経て富田城よりもさらに新しい。吉川広家期の内だとすれば、いよいよ下限間際と見通せて、慶長4年(1599)頃とする伊藤創氏の考えとも整合する。

江美城は、金箔瓦が確認されている山陰唯一の城郭である。今のところコビキAの瓦だけが確認され、吉川期に瓦葺き建物が整備された可能性が高い。しかし、本丸で主体を占める軒平瓦は唐草二転であるし、側区も広めである。やはり吉川期としても、そう古いものとは考え難い。この瓦も岡山をはじめとする山陽地方に類例が認められるのは先述の通りである。

以上、吉川期に瓦葺建物が整備された可能性がある城郭として富田城、米子城、江美城があるが、その年代は吉川期としても新しい時期が中心である。米子城に至っては下限間際とみられ、吉川領内での富田城→米子城の拠点移動ないしは支城整備が考古学的にも見えてくる。これらには、先に岡山城で活躍した工人が大きく関わっていた公算が強い。吉川氏が宇喜多氏の領域に居た瓦工人を招聘したということではないか。特に凸面宝珠2+木槌を作った工人は、製品量も多く、特に米子城湊山地区ではその主体を占めるから、しばらくは山陰に留まったと見通せる。また、播磨の工人もしくはその文様系譜を引き継ぐ工人の関与も垣間見え、岡山城で活躍した工人の波に先行するかも知れない。

次に、コビキB技法への転換を終えた堀尾期・中村期では、瓦葺き建物を伴う整備が行われた城郭として、疑いないのは富田城・松江城、米子城である。江美城もその可能性をもつ。

富田城では山上部でも下向三葉の軒平瓦が大量に出土するから、堀尾期での新たな建物整備も疑いなく、また山中御殿や富田川河床遺跡を含めて全域で出土し、瓦葺建物の量は相当に増大したと判断できる。まもなく、松江城の築城が始まり、さらに膨大な瓦葺建物が整備されたのである。堀尾期の堀尾領では、三刀屋城や瀬戸山城などの支城が整備されたと考えられるが、そうした支城では瓦は確認されていない。堀尾氏は本城に限って瓦葺建物を整備したとみられる。堀尾氏による瓦葺建物整備で中心的役割を果たした瓦工人は、軒平瓦では下向三葉B1の類の生産を専らとした。厳密な意味でのこの文様は、直結する先行形が他地域にも出雲・伯耆にもみられない特徴的なものであることから、堀尾氏の城郭整備に際して新たに創出されたものと評価できる。複数の瓦範がありながらも、この文様での斉一性が強く窺え、山陽地方をはじめとする他地域のこの時期の大規模城郭での瓦は雑多で多様な文様で構成され統一性に乏しいのと対照的といえる。それは、松江城とその城下町の瓦にも継続する。

一方、中村氏の城郭整備に伴って創出された文様として、米子城・江美城に共通する下向三葉唐草三転(132～134)が有力候補である。ただこれは、吉川期最終末の可能性もなお検討の余地があるように思う。松江城B3類の軒平瓦と近似する文様の瓦(104～113)を作った瓦工人は、出雲側に拠点があるのか、伯耆側にあるのか、あるいは双方に跨がるのかは判らないが、どちらにしても、総じて中村氏の城郭に葺かれた瓦も中心飾り下向三葉に重きをおいたのは確かである。

幅広下向三葉は、堀尾吉晴と中村一氏が秀吉恩顧の大名であったことの表象としての桐葉文⁽²⁸⁾で、細部では各々の個性を発揮したものとの評価もできる。松江城天守では五七桐文の鳥龕が掲げられ、少なくとも堀尾氏は分銅文とともに桐文に拘ったのは間違いない。また二人が秀吉家臣時代から同格・盟友という政治的土壌と地理的な距離の近さが、異なる領国でありながらも瓦供給体制の一部共有を実現させたのであろう⁽²⁹⁾。関ヶ原直後の山陰・美作で下向三葉が目立つのも、池田・中村・堀尾・坂崎(浮

田)・毛利、森と旧秀吉恩顧(～羽柴名字)大名の配置を考えれば理解しやすい。

中村期に機能していたとみられる瓦葺建物を伴う城郭は、本城の米子城、支城の江美城で、本城・支城関係が同範・同文瓦の共有という形で示される。また八橋城(琴浦町)や亀尾山城(日野町)でも瓦の存在が知られて、その可能性が注目される。支城にも瓦葺建物を有する点では、堀尾領とは異なる可能性が高い。ただし堀尾領では松江城築城後も富田城が機能していた可能性が強く、臨水地で本格的な城下町を形成した本城の松江城と内陸部の副城の富田城というセット関係が想定できる。

吉川期での瓦葺建物を認めるとしても、出雲・伯耆の城郭で瓦葺建物が本格的に林立するのは間違いなく関ヶ原直後の堀尾期・中村期である。この段階では東出雲・西伯耆を超える同範・同範的同文関係は確認されず圏域内で自己完結している。諸工人が複合しながらも活躍の舞台が小宇宙を形成しているように見えるのが前段との大きな違いで、徳川期の大名領国制の成立と連動した変化と評価できる。

なお、堀尾期の松江城下や中村期の米子城下では、城郭部と同じ瓦が出土するが、同時期の岡山城、広島城、讃岐高松城、小倉城など瀬戸内の各城下町と比べて著しく量や密度が少ない。この状況は、後の時代まで続く。山陰は寒冷地で霜害を受けやすい燻し瓦は風土として無理がある。そのことが、中世～豊臣期の瓦が乏しかったり、初期では山陽で活躍した工人に負う部分が大きかったり、城下町で瓦の普及度が低いことの大きな要因であろう。逆に言えば、それでも城郭中枢部では瓦葺き建物が建てられたのであり、その意味の重大さが判る。

3. 松江城の18・19世紀の瓦の検討

(1) 中心飾り五葉の軒平瓦をめぐる

松江城の五葉A類の文様系譜を考える上で17世紀前～中葉の製品とみられる米子城140・141(A群3類の一部)の存在は気がかりである。先ず16世紀後葉以降の各地の瓦を見わたすと、天正年間の播磨八正寺135から米子城140・141に至る系譜(単一の瓦工人の系列としてこの順に変化したという意味ではない)が浮かびあがる。いずれも中心飾りは葉脈表現がある幅広の三葉で、唐草の特徴が共通する。米子城140・141は慶長14年(1609)下限の中村期か、後の時期の製品かは判然としないが、この文様は米子で独自に創生されたというより、播磨起源の文様を引き継ぐ要素が強そうである。

次に米子城140・141と、明らかに新しい松江城五葉A類142を比べると、中心飾りは三葉と五葉、また線表現かベタ凸面かの違いはあるが、幅広の下向三葉が主体となるのは同じで、なにより唐草のパターンが類似する。工人集団としての連続性はともかくとして、松江城五葉A類は米子城例をモデルに創設された可能性があるのではないか。というのは、中心飾り五葉＝割蕨文は、18世紀代に入ると京都の宇治⁽³⁰⁾などで出現するし、江戸後半期には全国で散見でき、メジャーではないが一部地域で流行傾向がある。しかし、松江城のものは唐草が各々なりに異なっている。松江城の五葉A類も独自性の強い文様として出雲で生み出されたもので、在地工人による製品と考えられる⁽³¹⁾。唐草の三転は、全国的には16世紀末から17世紀前葉を中心にあって、松江城では古い形態を残しているとも言えるが、例えば備前福田(岡山県備前市)では18世紀中葉でも三転唐草の軒平瓦を生産していた。

五葉A類は多くが棧瓦で、キラコを使用している。全国的にみると棧瓦は17世紀第4四半期には成立している⁽³²⁾が、普及は18世紀中葉以降である地域が多い。岡山城下に至っては明治以後である。キラコの使用開始時期は特定できていない地域が多いが、例えば岡山城近隣では1753年から1796年の間に使用が始まる。この文様の瓦の内で棧瓦成立やキラコ使用に先行する段階があった可能性もあるが、その細分と編年は今後の課題である。いずれにしても、昭和の解体修理時の記録から天守に相当量が葺かれていたことは明らかで、元文3年(1738)～寛保3年(1743)の大規模な天守修理を契機に

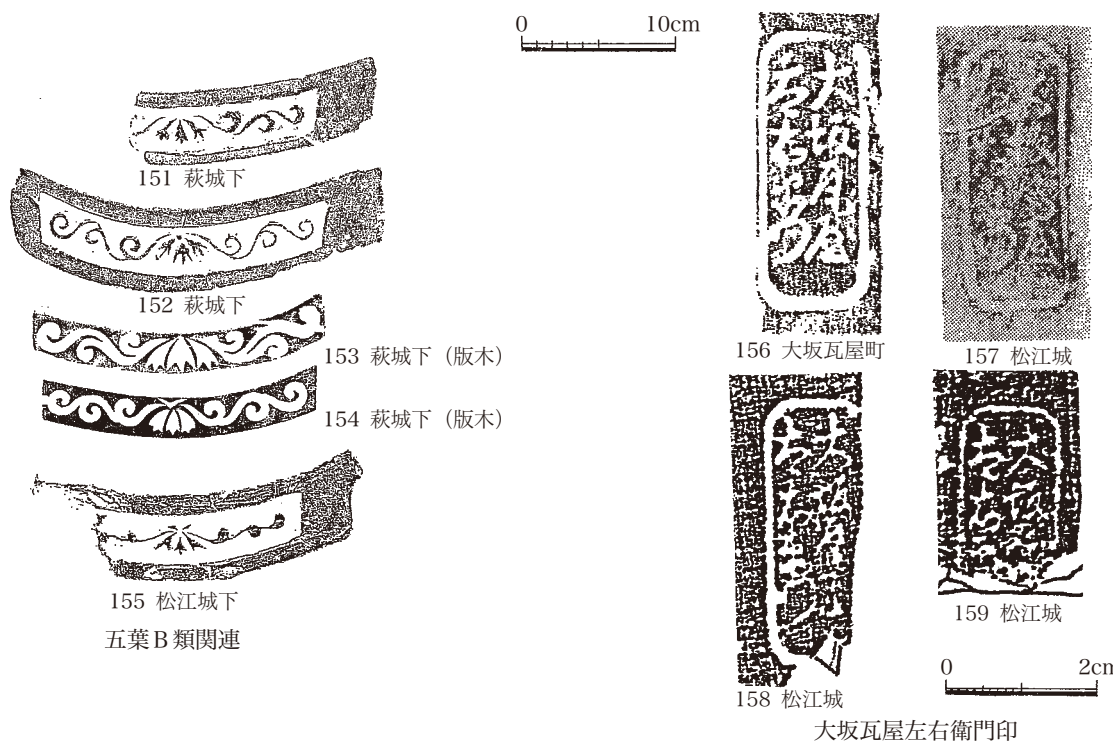


図10 18・19世紀の松江城の廻る各地の瓦(156～159は実大、他は1/5)

成立したか、そうでなくともその際の補足瓦の主力として用いられた可能性が強い。

生産地は松江城近隣とみられるが、現状では考古学的には特定できない。堀尾期・京極期に瓦生産が行われていた内堀北岸を含めて城下では瓦生産を示す絵図記載は見当たらず、近隣郊外の可能性を視野におくべきである。例えば、岡山城下では16世紀末から瓦生産を行っていた瓦町に代わって、17世紀第4四半期に城下町内でもより縁辺部に新たな生産拠点が形成され、城内・城下はもとより近隣郊外の寺社などに用いる瓦を大量に生産し始めた。また、18世紀になると郊外農村部にも新たな生産地が形成され始め、19世紀にはそうした郊外の新興瓦産地が林立する⁽³³⁾。こうしたことは、築城から暫く経っての城内・城下町の瓦需要の一段落、その後の城下町での瓦需要の再度の高まり、城下町での都市化の進行とあいまった敷地不足や煤煙・火事といった環境問題への対応、藩による瓦工人の施策的再編、瓦運搬に関わるインフラの充実、郊外部での瓦需要の高まりなどが複雑に絡んだ結果と考えている。松江城の場合も近似した動きの中で、17世紀の内に城下での生産が途絶え、18世紀に入って、あるいは遡っても17世紀末あたりに、松江城内や城下町にも瓦を供給する瓦産地が近隣郊外に成立し、中心飾り五葉B類の瓦を焼いたとの仮説を示しておきたい。城下での生産が途絶える点では、下向三葉B2・3類の下限時期と、五葉A類や橋文の開始時期の細かな検討が必要であるが、現状で製品を見る限り17世紀後半に瓦の量のうえでの空白期があるように思えてならない。

近代の瓦生産から遡ると江戸後期には本庄（松江市本庄町）⁽³⁴⁾、意宇東（東出雲町意東）⁽³⁵⁾、島田（安来市島田町）⁽³⁶⁾、長江（松江市東長江町）⁽³⁷⁾といった郊外農村部に瓦産地があった（図8）。いずれも臨水地で宍道湖・中海の水運と深く関わった立地に違いない。松江城との関係で最も注目されるのは本庄である。須田氏が確認したこの瓦工人に関する嘉永2年（1849）の嘆願書の冒頭には、工人の先祖は堀尾氏の代に名字帯刀を許されて瓦丁場として六畝の土地を拝領し、天守を始めとした松江城内の建物の瓦を造っていたが、松平氏の代に至って、工房の場所や瓦土を検討した上で、同面積の土地を本庄に貰い、天守補修用の瓦を作ったとの由緒記載がある。本庄は、先の仮説と重なって五葉A類生産地の有力候補といえる。さらに言えば、本庄での須田氏の聞き取りによると3軒あった瓦工人の家のうちの2軒は「家塚」の名字であるが、昭和の天守修理時に「元禄六癸酉年飯塚吉左衛門」と印した瓦が発見されている。須田氏は報告書では言及していないが、音からして「家塚」は「飯塚」が転化した可能性がある。元禄6年（1693）に飯塚吉左衛門が作った瓦、特にその文様の究明が大きな鍵を握っている。

なお、本庄の嘆願書には、先祖が出雲に来たのは寛永年間とし、先の堀尾期での瓦生産と矛盾もあるが、最先祖は「備前国瓦師八兵衛」としている。江戸後期の米子城下の大工町で城の瓦を焼いた「松原仁兵衛」も先祖は播磨から備前を経由して米子に来たとしており⁽³⁸⁾、先述の富田城・米子城と岡山城の瓦の関係に照らして示唆的である。16世紀末～17世紀にかけて、岡山→出雲・伯耆の瓦工人の流れは複次的にあったのかも知れない。特に伯耆は池田領になることから、寛永9年（1632）の池田家一族間での国替時をピークに備前と因幡・伯耆の間で武士も商工民も相当に動いたのは間違いない。

文様が類似する五葉B類については、松江郊外農村部の瓦工人の製品ともみられるが、それ以上に151～155に示されるように19世紀の長門萩で作られた瓦との類似性が強く、萩の瓦工人かその系譜を引く工人による可能性を考えておきたい。

（2）橋文の軒平瓦を廻って

松江城の橋文の軒平瓦は図4 42～48の様に文様が既に定式化した大坂式を含んでおり、内ではそれらが古いものとみられる。そうしたものでも元禄以降の特徴とされる下のガクが二股に分かれたもの

が主体である。43 の様に実が小さく古相のものから 45 の様に実が大きく柿実形となった新相のものまで含んでおり、大枠としては 18 世紀半ばから 19 世紀にかけての各時期のものが混合しているとみられる。

今のところ瓦当部を残す個体での確認例は見当たらないが、大坂の瓦工人自身が製作したことが確実な刻印をもつものは、42～48 の様な定型的な大坂式に伴うものであろう。松江城で確認できるのは「大坂瓦屋太右衛門」（「太」はあるいは「左」）の 1 種のみである（157～159）が、大坂瓦屋町遺跡（大阪市中区）で同様の刻印をもつ瓦（156）が出土している。松江城で確認できている刻印と細かく比べると同形・同大・同字であるが印判は異なる。18 世紀後半の土壙出土で 144 などの瓦と共伴するが、一帯で出土する瓦は幕府御用瓦師を務めた寺島家の配下の瓦工人の製品と判断される⁽³⁹⁾。この刻印をもつ松江城の瓦を作ったのは寺島配下、いわば大坂式の本家本流の瓦工人であった。

松江城の定型的橘文の瓦は大坂で焼かれた搬入品か、大坂工人が松江へ出張して焼いたのかは検討課題であるが、46・47 のように定型的な大坂式文様でも左棧瓦があるのは注目される。というのは、全国的にみると瓦当立面が「へ」形の右棧瓦が圧倒するのに対し、出雲を中心とした地域では左棧瓦が優位という事実⁽⁴⁰⁾があり、そうであるなら 46・47 は出雲仕様であってオーダーメイド性が強い。

42～48 に対して 49～51 は大坂式の垂流というか、大坂式の影響を受けながら土着化したという評価が相応しい文様である。

松江城の橘文の瓦は、大坂に本拠をおく工人によるものを確実に含みつつ、その系譜を引く、もしくは製品を介して模倣を行った在地工人の製品も含んでいると見通せる。後者が焼かれたのは先に示した宍道湖・中海沿岸の瓦産地が候補となる。もはや蓮華文といえる 51 は旧松江郷土館収蔵資料台帳⁽⁴¹⁾に写真添付された左棧瓦の内に近似する文様のものがあり、長江産かも知れない。

江戸後半期の大坂式橘文の軒平瓦は、関西と瀬戸内航路で繋がっている岡山や広島、高松では目立たないのに対し、かえって遠隔地の山陰の瓦（145～150）では萩における堺瓦⁽⁴²⁾を初め、津和野、米子、鳥取など山陰では相当量が認められる。松江城の瓦もそうした関西系の分布圏の一面を占めるものとして理解できる。こうした状況は、瓦需要が多い瀬戸内では地場の瓦産地が豊富に形成されたのに対し、山陰では燻瓦の需要が低く、応じて瓦産地の形成が進まなかったことの裏返しであろう。関西の瓦工人・瓦商人からすれば、競争相手の少ない山陰は絶好の売り込み市場だったに違いない。松江はやや外れるが、山陰全体とすれば、そうした構図を一転させるのが、寒冷気候に適合した釉薬を掛けた石州瓦の登場・席卷という図式になるだろう。それは幕末、むしろ明治に入ってから話である。

おわりに

出雲では松江城築城に先行する 16 世紀末に始まった城郭所用瓦は備前岡山との関連が濃厚に窺え、播磨の影もみえる。17 世紀前葉には堀尾氏の出雲入国に伴って自前の瓦工人が編成され、下向三葉を中心飾りに据えた独自性の高い文様の軒平瓦が創出され、富田城に主力として葺かれて瓦文様の斉一性を高め、居城の移動に伴って、そのまま松江城の瓦に引き継がれた。この時期は、出雲東部から伯耆東部に跨る生産供給体制も垣間見える。そして地場での瓦生産がやや停滞したとも思える 17 世紀後半を経て、18 世紀には在地様式の瓦が創出され、天守の修理などに用いられた。大坂の工人による製品の参入もあり、松江城周辺では五葉に象徴される在地出雲系と橘に象徴される外来関西系の二重構造で瓦が供給される段階に至った。19 世紀になると、郊外農村部での新たな瓦産地の成立も想定できる。以上をまとめとして、松江城を廻る瓦の研究を次のステップに繋げたい。

本稿は、松江市史編纂に関連して行われた、平成 26 年 2 月 9 日の松江城出土瓦の検討会、ならびに

平成 26 年 8 月 25 日の出雲・伯耆地域の城郭・遺跡出土瓦の比較検討会の成果に多くを負っている。瓦の理解や評価の誤りは当然に筆者の責任であるが、開催にご尽力された方々ならびに参加者、対象資料の発掘や分析に長年関わってこられた皆さん全員の成果と思っている。とりわけ、市史編纂室の稲田信・福井将介、石塚晶子、同松江城部会の西尾克己・岡崎雄二郎、松江市埋蔵文化財調査室の川上昭一、出雲市教育委員会の花谷浩、安来市教育委員会の舟木聡、米子市教育文化事業団の佐伯純也、江津市教育委員会の伊藤創の各氏には有益なご助言をいただき、また多くの便宜を図っていただいた。

〔追記〕 本校脱稿後、18・19 世紀の松江城の瓦の生産地を探る手がかりを得るため意東、本庄、秋鹿・長江、出雲大津などの瓦産地を訪ね、寺社や民家に残る瓦の文様を点検する作業を行った。当地で使う瓦は創業中である限り当地産が卓越するに違いないからである。現況は多くの建物で近年製の石州瓦が葺かれているが、江戸末から明治・大正・昭和にかけての黒瓦＝左棧瓦がなお葺かれている建物や野積みされている場所がある。

そのうち本庄では、五葉 A 類とまったく同文の瓦が複数地点で確認でき、相対的に古いとみられる黒瓦の主体を占めることが判った。この文様は他の瓦産地では確認できていない。こうしたことから、松江城の五葉 A 類は本文で記した状況証拠と合わせて本庄の工人によることがほぼ確定的となった。

いっぽう、意東は大坂式の垂流が卓越するが、中心飾りの橘の実相当が小さく、それを皿形の図形で受け、その下に実と同大の凸丸を置くという特徴をもつ。出雲大津では、大坂式の崩れとみられるものは中心飾りの表現や唐草が松江城のものとは異なるし、中心飾りが蓮華風で唐草相当部が扁平で上方向にだけ延びるものが卓越する。

松江城で確認されている大坂式と近似した文様を含むのは秋鹿・長江である。ここでは、大坂式の垂流や中心飾りの橘が崩れたものを含むが、左右の鰐の先端をきちっと二股に割るという原則を昭和まで貫いている。真正の大坂式と言ってよいものも含んでおり、松江城の大坂式のうち、大坂瓦屋の刻印に伴うものを除いた残り、あるいは左棧瓦のものは、長江の工人による可能性が強そうである。実は、長江瓦の創業者とされる衣更源左衛門に関しては、20 歳の時に大坂の瓦所で修業し 5 年後に長江に帰って瓦焼いたという明和 2 年（1765）の文書があり、注 37 曳野書に紹介されている。この経緯は、長江が正統な大坂式文様を採用したことと見事に整合する。

以上の様に考えると、本文で考えた五葉在地系と橘外来系の二重構造とは、実体としては中海に臨む東の本庄と宍道湖に臨む西の長江の二産地の対峙ということなる。瓦産地としての廃絶は本庄の方が早い、双方とも創業以来長くに渡ってほぼ同じ文様の瓦を作り続けたことになる。なお、松江城 49・51 は秋鹿・長江産の可能性が強いが、明治の天守修理時の補足瓦の可能性もある。また、松江城五葉 B 類は産地特定には至らないが、平田の元石橋邸で確認できた。

注

- (1) 須田主殿 1954『城郭史から見た松江城天守と昭和の修理』（稿本・松江歴史館所蔵）
- (2) 織豊期城郭研究会 1994『織豊期城郭の瓦』
- (3) 山崎信二 2008『近世瓦の研究』同成社
- (4) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2011『松江城下町遺跡発掘調査報告書』
- (5) 飯塚康行 2001「松江城出土軒瓦について」『史跡松江城整備事業報告書』調査編 松江市教育委員会
- (6) 森田克行 1984「屋瓦」『摂津高槻城』高槻市教育委員会
- (7) 乗岡実 1997「瓦について」『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会、乗岡実 2001「瓦

について』『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 以下、岡山城出土瓦についての記載は両書による。

- (8) 金子智 1996「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第 101 号
- (9) 注 3 ほか
- (10) 注 7 と同じ
- (11) 伊藤創 2013「伯耆におけるコビキ技法の転換期」『山陰中世土器研究』1 山陰中世土器研究会
- (12) 新庄正典 2012「松江城下町遺跡出土の桔梗紋の瓦を使用した家について」『松江歴史館研究紀要』第二号 松江歴史館
- (13) 近藤真佐夫 1995「若松城の黒瓦について」『織豊城郭』第 2 号 織豊期城郭研究会
- (14) 舟木聡 2003『史跡富田城跡 環境事業報告書Ⅱ』広瀬町教育委員会 富田城の瓦分類は同書による
- (15) 中井均 1994「織豊系城郭の特色について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
- (16) 佐伯純也 2003「米子城跡出土の近世瓦」『関西近世考古学研究』X I 関西近世考古学研究会 米子城の瓦分類は同書による
- (17) 松江市教育委員会が発掘調査。岡崎雄二郎氏の便宜で同範関係を検討。花谷浩氏によるご教示も得た。
- (18) 田中幸夫 1994「姫路城瓦と姫路系瓦工について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会、田中幸夫 2004『播磨の中世瓦』
- (19) 注 3 と同じ。また平成 26 年 8 月 25 日の検討会で確認した。
- (20) 注 11 と同じ
- (21) 平成 26 年 8 月 25 日の検討会での出雲市教育委員会花谷浩氏による資料提示とご教示による
- (22) 注 11 と同じ
- (23) 注 11 と同じ
- (24) 堀尾・京極・松平の各期の松江城下町絵図での記載については市史編纂室の福井将介氏のご教示を得た。
- (25) 注 3 と同じ
- (26) 舟木聡氏の便宜で平成 26 年 8 月 25 日の検討会で実見
- (27) 注 18 の田中 2004
- (28) 木戸雅寿 1995「織豊期城郭にみられる桐紋瓦・菊紋瓦について」『織豊城郭』第 2 号 織豊期城郭研究会
- (29) 加藤理文 2012『織豊権力と城郭』高志書院
- (30) 杉本宏 2003「棧瓦の成立過程と京瓦師の動向」『関西近世考古学研究』X I 関西近世考古学研究会
- (31) 注 3 と同じ
- (32) 注 30 と同じ
- (33) 乗岡実 1996「岡山市近郊における近世瓦の生産と流通」『岡山市の近世寺社建築』岡山市教育委員会
- (34) 注 1 と同じ
- (35) 伊藤菊之輔 1948『意東村史』東出雲町立意東公民館、東出雲町誌編纂委員会 1978『東出雲町誌』
- (36) 注 1 と同じ
- (37) 須藤吉郎編 1968『古江百年史』松江市古江公民館、曳野弥生 2010「長江瓦について」『古江公民館報』第 214 号 松江市古江公民館
- (38) 注 16 と同じ
- (39) 黒田慶一ほか 2009『瓦屋町遺跡発掘調査報告』大阪市文化財協会
- (40) 永田鉄雄 1990『出雲大津窯業誌』
- (41) 岡崎雄二郎氏のご教示による

(42) 嶋谷和彦 2003「堺瓦の生産と流布」『関西近世考古学研究』X I 関西近世考古学研究会、柏本朝子 2003「萩における堺瓦の移入について」『関西近世考古学研究』X I 関西近世考古学研究会

図版についての注（本稿遺物番号：出土地・報告書掲載番号、＝報告書分類）

第1～4図＝松江城の瓦

1：二の丸太鼓櫓西SK01・50＝A－1類、2：二の丸太鼓櫓西SK01・51＝A－2類、3：大手門跡・189＝A－3a類、4：城郭内＝A－3b類、5：城郭内＝A－4類、6：城郭内＝A－5類、7：城郭内＝B－1類、8：本丸地区＝城郭内B－2類、9：城郭内＝B－3類、10：二の丸太鼓櫓西SK1・49＝C－1類、11：二の丸太鼓櫓西SK01・50、12：城下（歴史館）北屋敷第3面SD01・945、13：城郭部＝a－1a類、14：本丸北東隅調査区第3層・10、15：天守修理時調査瓦、16：城郭部＝a－1b類、17：天守修理時調査瓦、18：城下（歴史館）南屋敷第4面SD01・2309、19：馬溜地区・181、20：二の丸太鼓櫓西SK01・50＝a－2類、21：城下（歴史館）北屋敷第3遺構面SD01・955、22：城下（歴史館）南屋敷第3－1面SD8・2001、23：天守修理時調査瓦、24：天守修理時調査瓦、25：脇虎ノ口跡・6、26：天守修理時調査瓦、27：脇虎ノ口跡・7、28：脇虎ノ口跡・5、29：城下（歴史館）南屋敷第3面・1695、30：城下（歴史館）南屋敷第3面SK32・1606、31：城郭部＝a－3類、32：本丸地区・12＝a－4類、33：本丸北東隅第3層・12、34：城郭部＝a－5、35：城下（歴史館）南屋敷第3面・1694、36：天守修理時調査瓦、37：城下（歴史館）北屋敷第1面・526、38：脇虎ノ口跡・8、39：本丸北東隅第3層・15、40：天守修理時調査瓦、41：城下（歴史館）北屋敷第1面SK3・476、42：城郭部＝b－2類、43：天守修理時調査瓦、44：城下（歴史館）北屋敷第1面SK3・483、45：城下（歴史館）北屋敷第2面SK21、46：天守修理時調査瓦、47：城下（歴史館）北屋敷第1面SK3・481、48：城郭部＝b－3類、49：天守修理時調査瓦、50：天守修理時調査瓦、51：天守修理時調査瓦、52：本丸管理事務所西側土坑、53：城下（歴史館）北屋敷第1面SK3・482

第5～10図

54～56：京聚楽第龍前町・花立町、57：大和興福院本堂、58：摂津大坂城、59：播磨隋願寺、60：播磨鶴林寺、61：備前岡山城本丸中の段・67、62：備前岡山城本丸中の段・73、63：備前岡山城本丸中の段・66、64：美作津山城、65・66：因幡鳥取城初蔵跡、67：石見津和野城南出丸西側下、68：安芸不動院楼門、69：安芸厳島神社千畳閣、70 備後尾道浄土寺阿弥陀堂、71～75：安芸広島城大手郭武家屋敷地、76：長門串崎城、77：豊前小倉城桐葉文3類、78・79：筑前福岡城、80・81：肥前名護屋城、82：豊後府内城、83：肥前長崎奉行所跡、84～89：会津若松城、90：淡路妙京寺本堂、91：播磨円教寺、92：肥前名護屋城、93：筑前観世音寺、94：松江城城郭部＝a1－a類、95：富田川河床遺跡（富田城下）、96：松江城城郭部＝a1－b類、97：富田城三の丸南斜面・168＝A－1類、98：富田城、99：富田城三の丸地区第1トレンチ・20、100：松江城二の丸太鼓櫓西SK01・50＝a－2類、101：松江城下（歴史館）北屋敷第3面SD01・955、102：米子城湊山地区内膳丸＝A群1類、103：松江城下（歴史館）南屋敷第3－1面SD08・2002、104：富田城三の丸＝A－2類、105：江美城八幡丸・7、106：米子城＝A群1類、107：松江城本丸地区・12＝a－4類、108：米子城湊山地区内膳丸、109：伯耆米子城、110：松江城本丸北東隅第3層・12、111：松江城下（歴史館）南屋敷第3面・1694、112：米子城湊山地区、113：米子城湊山地区内膳丸、114：姫路城、115：大坂城、116：富田城三の丸＝B－1類、117：江美城八幡丸、118：松江城本丸管理事務所西側土坑、119：備前岡山城本丸中の段、120：富田城三の丸地区南斜面・169＝B－3類、121：備前岡山城本丸中の段・78、122：富田城三の丸帶曲輪石垣前面・126＝B－2類、123：米子城飯山地区＝F群、124：打吹城本丸付近、125：米

子城＝B群、126：備前岡山城本丸中の段・16、127：富田城本丸地区・183＝A－3類、128：備前金山寺、129：備前岡山本丸中の段・46、130：江美城本丸、131：安芸広島城大手郭武家屋敷地、132：江美城本丸、133：米子城、134：米子城＝A群2類、135：播磨八正寺、136：播磨朝光寺、137：日吉神社、138：摂津大坂城、139：播磨円教寺、140：米子城＝A群3類、141：米子城湊山内膳丸、142：松江城脇虎ノ口跡・8、143：大阪瓦屋町遺跡S K 45・72、144：大阪瓦屋町遺跡S K 86・85、145：松江城下（歴史館）北屋敷第1面S K 3・483、146：松江城下（歴史館）北屋敷第2面S K 21、147：鳥取城粉蔵跡、148：米子城下8次、149：津和野城南出丸西側下、150：萩城、151：萩城外堀・1698、152：萩城外堀・1715、153・154：旧萩阿川家所蔵版木拓本、155：松江城下（歴史館）北屋敷第1面S K 3・476、156：大阪瓦屋町遺跡S K 86、157：松江城天守修理時調査瓦、158・159：松江城二の丸下の段・米蔵跡など

図出典文献：本稿遺物番号

松江市教委 2001：1～11、13・16・31・19・20・31・32・34・42・48・100・107

松江市教委・事業団 2011：12・18・21・22・29・30・35・37・41・44・45・47・53・101・103・111・145・146・155

松江市教委 1986：25・27・28・38・142

松江市教委 2007：14・33・39・110

菊池 1953：15・17・23・24・26・36・40・43・46・49・50・51・157

岡崎雄二郎整理資料 2014：52・118・158・159

森島 1994：54～56

山崎 2008：57・59・60・68・69・76・78～89・92～94・96・99・106・109・114・133・150

佐藤 2003：77

大阪市文協 1984：58

黒田 1994：115・138

岡山市教委 1997：61～63・119・121・129

岡山市教委 2001：126・128

津山市教委 1995：64

鳥取市財団 2001：65・66・147

宮田 2012：67・149

広島市財団 2006：70～75・131

田中・土橋 1990：90・91・135～137・139

藤原資料研究会 2009：95

広瀬町教委 2003：97・98・104・116・120・122・127

佐伯 2006：102・125・134・140・148

伊藤 2013：105・108・112・113・117・121・123・124・130・132・141

大阪市文協 2009：143・144・156

山口県センター 2006：149・150

柏木 2003：151・152

図出展に関わる文献（掲載瓦に関する参考文献）

伊藤創 2013「伯耆におけるコビキ技法の転換期」『山陰中世土器研究』1 山陰中世土器研究会

大阪市文化財協会 1984『難波宮址の研究』第八
大阪市文化財協会 2009『瓦屋町遺跡発掘調査報告』
岡山市教育委員会 1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』
岡山市教育委員会 2001『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』
柏本秋生・柏本朝子 2003「改印のある瓦範型について」『山口大学考古論集』近藤喬一先生退官記念事業会
菊池敏光 1953『松江城天守瓦の拓本』・『松江城天守瓦の拓本』壺・『松江城天守瓦の拓本』貳、『松江城天守各種瓦刻印の摺本』・『平瓦刻印拓本』・『唐草瓦拓本』ほか（松江歴史館所蔵）
黒田慶一 1994「大坂城跡」『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭研究会
佐伯純也 2006「米子城の瓦」・「米子城跡」『城郭瓦の変遷』中国・四国城館遺跡検討会
佐藤弘司 2003「小倉城下の近世瓦」『関西近世考古学研究』X I 関西近世考古学会
田中幸夫・土橋健二郎 1990「妙京寺と播磨の瓦」『妙京寺の古瓦』一宮町教育委員会
津山市教育委員会 2000「津山城本丸二の丸確認調査報告」『年報津山弥生の里』第2号
鳥取市文化財団 2011『鳥取城跡初蔵跡（第20次調査）』
広島市文化財団 2006『広島城跡太田川河川事務所地点』
広瀬町教育委員会 2003『史跡富田城跡 環境事業報告書Ⅱ』
藤原久良採集陶磁資料調査研究会 2009「島根・富田川河床遺跡の研究」『古代文化研究』第17号 島根県古代文化センター
松江市教育委員会 1986『史跡松江城保存修理事業報告書』昭和60年度
松江市教育委員会 2001『史跡松江城整備事業報告書』第2分冊 遺構編
松江市教育委員会 2007『史跡松江城石垣修理報告書』
松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2011『松江城下町遺跡発掘調査報告書』
宮田健一 2012「津和野城跡外縁部の遺物をめぐる一考察」『西国城館論集』Ⅱ 中国・四国地区城館調査検討会
森島康雄 1994「聚楽第跡」『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭研究会
山口県埋蔵文化財センター 2006『米子城（外堀地区）Ⅲ』
山崎信二 2008『近世瓦の研究』同成社

（のりおか みのる 岡山市教育委員会文化財課長）